

## 19 世紀英華字典 5 種 解題

陳力衛・倉島節尚

### 0.

19 世紀の英華字典は中国近代文化史においてだけでなく、日本近代語の成立にも大きく寄与したことが知られている。来年は最初の華英・英華字典の著者ロバート・モリソンが中国上陸 200 年にあたる年なので、それを記念する意味もあって、もともとある事典のために書いた原稿を先に『或問』に出して大方のご批判とご意見を仰ぐ次第である。下記のように時代順に 5 種の英華字典の解題をならべる。倉島は第 3 節のメドハーストの辞書を執筆し、陳はその他を執筆し、体裁の統一を整えた。なお、重複を避けるため、本来項目ごとに列した参考文献を一括して最後に置くことにした。

### 1.

【書名】A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE, in three parts. Part the First; containing Chinese and English, arranged according to the radicals; Part the Second, Chinese and English arranged alphabetically; and Part the Third, English and Chinese.

【著者】ロバート・モリソン(R.Morrison 1782-1834,漢字名:馬礼遜)。イギリス生まれでプロテスタントの最初の宣教師として 1807 年に中国に上陸し、主に聖書の中国語訳や英華辞典の編集に従事した。

【成立】三部六巻の大著の完成には十三年の年月を費やしたと著者は前書きに書いている。Part I: Vol. 1. (East India Company's Press, Macao,1815), Vol. 2. (Kingsbury, Parbury, and Allen, London, 1822), Vol.3. (Kingsbury, Parbury, and Allen, London, 1823) Part II: Vol. 1. (East India Company's Press, Macao,1819) Vol.2 (East India Company's Press, Macao,1820) PART III: (Black, Parbury, and Allen, London, 1822)。【解説】第一部『字典』は第一～三巻の三冊より構成され、『康熙字典』に基づいて約四万字の見出し字を収録し、英語で説明を施した華英字典であり、画数、部首によって配列されている。一巻には前付として献辞・序説・凡例・DIALOGUES (挟込) が付されている。第二部『五車韻府』は第一、二巻ともに内扉に「五車韻府」とある。本

文は同じく華英字典であるが、アルファベット順に音節で検索でき、音節や部首の一覧表を付している。なおこの『五車韻府』はその後 1865 年、1879 年、1907 年と再版され、再編纂された縮冊版もある。第三部は漢字名がなく一巻のみの英華字典である。本文はわずか 480 頁で、アルファベットに関する説明や、中国語表記に用いたアルファベットの発音法などの前付がついている。

日本では早くからモリソンの辞書に関する記述が幾つか見られ、「漢字注以英語、洋語釈以漢字者、始于英人莫栗宋。」という佐久間象三の言がある。ペリー来航以降、安政年間に唐通事たちが『五車韻府』を清国より取り寄せたい旨を願っていることから、その辞書が当時長崎では既に知られていたことが分かる。当時の関心は、漢字語をいかに英語に訳しているかであったと見られる。事実、日本における『五車韻府』の所蔵状況から見てもそのことがわかる。

それに対して、第三部の英華字典はむしろ中国紹介の百科全書の感すらある。Music の語釈では楽、音楽、のほかに『律呂正義』にある中国音楽の古代の音階と西洋の五線譜とを対応させて説明する。「Porcelain 磁器」の項目では中国における磁器の産地、官窯名を載せ、それから三頁にわたって陶磁器ができるまでの二十工程について詳しく説明する。その結果、大型本の一冊であるにもかかわらず、一万語足らずの英単語しか収録していない。しかも最初の英華字典であるだけに、英語に対応する中国語訳が説明的になるものが多い。たとえば現在「侵食」にあたる Encroachment には四字熟語の「防微杜漸」を当てたり、「鉱物学」にあたる Mineralogy は当時では訳せず、中国本草学の代表作『本草綱目』を当て、それに I 水部、II 火部、III 土部、IV 金石部を並べて説明したりしている。また、今日の百科全書にあたる Encyclopedia や幾何学を意味する Geometry にそれぞれ中国の書物名『三才図会』と『幾何原本』を対応させている。用例の引用は『水滸伝』『紅樓夢』などの小説や『幾何原本』『対数闡微』『天下地輿全図』『数理精蘊』などの漢訳洋書から純粹の中国語を抽出して、英語訳をつけたらしく、そのため、「天体、地球、天文、地理、対数、乗方、平方」などが訳語として見られる。ほかにも近代訳語と関係の深い言葉をいくつか挙げておく。「apostle 使徒、blacklead pencil 鉛筆、Christ 基利斯督 critic of books 善批評書、digest 消化、exchange 交換、judge 審判、law 法律、level 水準、medicine 医学、natural 自然的、necessarily 必要、news 新聞、novel a small tale 小説書、organ 風琴、practice 演習、radius 半径線、spirit 精神、unit 単位、men 人類、life 生命、plaintiff 原告、materials 材料、arithmetic 数学、method 方法、conduct 行為、language 言語」など。これらの語は後に他の英語との対訳をなしていくものもあるが、基本的な対応関係をこの辞書に求めることができる。

むろん、近代英華字典の嚆矢としてこの辞書は後世に与えた影響が大きい。ウィリアムスは自分の辞書の序言と参考書目でこの辞書を言及しているし、メドハースト (W.H.Medhurst) の English and Chinese Dictionary もほぼ全面的にこの辞書の上に立って発展させたものである。だから、近代日本では翻刻されていないが、後続の英華字典に反映される形で訳語が受け入れ

られていると言える。現在ではゆまに書房による翻刻本 (B5 版、1996) がある。

## 2.

【書名】 *An English and Chinese Vocabulary in the court dialect.*

【著者】ウィリアムス (Samuel Wells Williams 1812-1884, 漢字名: 衛三畏 (または衛廉士))。宣教師として 1838 年中国に渡り印刷関係を担当するかたわら、中国語と日本語を研究し、『中国総論』(1848) を刊行。1853 年、1854 年ペリー一艦隊来航時の通訳として来日したことがある。1856 年教会の職を辞し、米国駐華公使館の外交官として働き、『漢英韻府』(1874 年) も著した。1877 年帰国後、エール大学の中国学教授に任じられる。

【成立】1844 年 Macao の香山書院梓行、中国語名 『英華韻府歴階』。

【解説】この辞書には長い解説がついており、はしがき、中国語関係文献一覧や中国語文献主要翻訳書一覧を含めた序説はこれまでの中国及び中国語研究についてのよい案内となる。巻末にはこの辞書に出てくる漢字を部首別に並べ、それぞれに官話、広東語、アモイ語の読みをつけた索引が付してある。本文 (1~335 頁) は、一ページに左右二段組みでほとんど一行一語、または二行一語を並べているため、モリソンの英華辞書より 4000 語も多い 13,400 語を収録している。書名の通り、*Vocabulary* であってほとんど英語と中国語の対訳形式をとっており、前のモリソンの辞書よりは訳語が短くて簡潔なのが特徴である。むろん、モリソンの辞書を踏襲するところも多く、たとえば Flower の見出し語の後にモリソンが 148 種類の草花を列したのに対して、この辞書ではなんと 366 種類もの草花を並べた。ゆえにペリー来航時に随行した中国人羅森の日記にも「衛三畏素語鳥獸草木之名」とある。

また、この辞書では「barometer 風雨針、map 地理図、meteorology 気奇象論、midwifery 保生篇、zoology 生物総論」のように近代語彙に近づく訳が多い一方、「circulate 運動、commerce 貿易、deduce 推論、observe 知覚、possessions 産業、professor 博士、study 課程」のように、今日の英語の対訳と異なるものもある。さらに、「agriculture 農業、cabinet 内閣、coffee 咖啡、compare 比較、対数、consul 領事、diamond 金剛石、elect 選挙、grammar 文法、material 材料、mathematics 数学、museum 博物院、newspaper 新聞紙、record 記録、記事、yard 碼」のように、近代概念を表す対訳が多く見られる。

日本では明治二年に『英華字彙』として翻刻された。原書にある本文のみを抽出し、序文や解説や漢字部首索引などをすべて省き、さらに本来漢字訳語にあった中国語の読みをも取り去って、代わりに、解説に役立てようと訓点を施している。編者柳沢信大の序文に、「余曾テ、英漢倭対訳ノ字書ヲ編述セント欲シ、稿ヲ起シテ未ダ成ラズ、子達森川君、夙ク字彙一冊ヲ有ス、英士ス維爾士維廉士ノ所著ナリ、頃、将ニ刊行シテ諸ヲ世ニ会セントシ、余ニ付テ謀ル、余其ノ所見ヲ符スルヲ喜ビ、慇懃賛成シ、敢テ自ラ揣ラズ、之ニ訓話ヲ加ヘ、且ツ一言ヲ弁シ、以

テ其唱道ト為ス」云々とある。ただ、その翻刻版の表紙では、「日本柳沢信大校正訓点／英華字彙／清衛三畏鑒定／英斯維爾士維廉士著／松莊館翻刻蔵板／官許上木／明治己巳年初秋」となっており、著者を英国人の「ス維爾士維廉士」とし、監修を清国の「衛三畏」として同一人物を別人であるかのように理解したようだ。中国でも音訳に基づく名前を「衛廉士」としているから同じように誤解されやすいところではある。和刻版と原書と比較してみて、たとえば原文の「Resentful 結恨」を「結怨」に、「rivulet 河岔子」を「河岔」にと、多少の字句の改変はあるものの、基本的に忠実に翻刻されていることが分かる。この日本語版の復刻には「初期日本英学資料集成第17巻、雄松堂、1976」と「近代日本英学資料、ゆまに書房、1995」とがある。

### 3.

【書名】原書名は ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY. IN TWO VOLUMES.

【著者】W.H.メドハースト (Walter Henry Medhurst, 1796~1857、漢字名：麦都思)。イギリス人宣教師で、ロンドン伝道教会 (London Missionary Society) の一員として 1817 年マラッカに渡り、その後ペナンへ、さらにバタビアへと移り、宣教に従事した。少年時代から印刷技術を身につけていたので、印刷館を管理し、教書などの出版を行っていた。布教上の目的でマレー語・中国語や日本語を研究し、後続の宣教師のために対訳辞書を編纂した。1830 年にはバタビアで『英和・和英語彙』(An English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary) を編纂し、石版印刷で刊行している。

【成立】第 1 巻が 1847 年、第 2 巻が翌 48 年に、中国上海の MISSION PRESS で印刷された。2 分冊。ほぼ現行の A5 版に近く、横幅が 1.5 センチほど狭い判型。

【解説】メドハーストは、プロテスタントの最初の宣教師として 1807 年中国に渡ったモリソン (Robert Morrison, 1782~1834) の後を継ぎ、モリソンが作った華英・英華字典をもとに新たな訳語などを独自に追加して華英・英華字典を編纂した。

華英字典 (CHINENSE AND ENGLISH DICTIONARY ; CONTAINING ALL THE WORDS IN THE CHINESE IMPERIAL DICTIONARY, ARRANGED ACCORDING TO THE RADICALS. 第 1 巻は 1842 年、第 2 巻は 43 年にバタビアで印刷) が先に編纂された。これは『康熙字典』をベースにして中国語の見出し語に英訳語を添え、漢字の部首順に配列した字書である。英華字典を作るには、華英字典を作るより中国語についてのいっそう高度な知識が必要であったので、まず華英字典を作り、それを裏返すような形で英華字典の編纂を行ったものと思われる。

英華字典では、序文に続いて中国語の発音が概説されている。1 ページ横 2 段組 36 行で、第 1 巻は A から K まで、第 2 巻は L から Z までが収められている。英語の見出し語に続いて中国語の訳語、その発音、中国語の類義の訳語が並ぶ。例えば、Book には書・冊・籍・書本・書冊・

典籍・書卷・書籍・書契・簡策・文籍・・・などの訳語が発音を添えて並べられている。さらに book のあとに、books made of bamboo (竿牘), a book basket (書籠), a book chest (書筒), a book press (書厨、書櫃)、a bookshelf (書架)・・・contained in books (篇什所載)、there is a benefit in reading books (開卷有益) のような book をふくむ句や短文の見出しが掲げられている。

華英字典が『康熙字典』と関係の深いことは、その書名に付されている文や英華字典の序文から明らかであり、華英字典を踏まえて作られた英華字典も、『康熙字典』と内容的に関係を持つ。すでにこの面での研究がなされているが、なおいっそう詳細な調査が期待される。メドハーストが華英字典から英華字典へと進めた編集が、どのような手順でなされたかということはたいへん興味ある問題である。また、ベースになっているモリソンの華英・英華字典との関係も、より詳しく究明されるべきであろう。さらに、この字典のあとで編纂されたもの、例えば W.ロブシャイドの『英華字典』(1866~69 香港)などに、どのように受け継がれたか、また日本の漢和辞典や英和辞典に与えた影響、あるいは日本語に定着した訳語などとの関係について、すでに森岡健二氏の論考があるが、さらに詳しく考察してみたいものである。

#### 4.

【書名】English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation

【著者】ロブシャイト (W.Lobscheid 漢字名: 羅存徳)。宣教師として1848年中国に渡り、はじめ香港、後に広州で布教と医療にあたり、数種類の医学書を編集した。

【成立】Daily Press Office, Hongkong, 1866 ~1869

【諸本】東北大学・学術資料データベース研究会蔵本、佐藤武義・成澤勝共編「ロブシャイド『英華字典』アビリティ株式会社1995 (CD-ROM 復刻版)。東京美華書院1996年に二冊本の復刻本(1~2020頁、那須雅之解説)がある。

【解説】ロブシャイトの辞書はもともと四分冊で出、二巻ずつの合訂本も多い。内扉に「英華字典」とある。この辞書の規模はそれまでの最大のものであり近代漢語訳語の宝庫として注目される。所蔵数から見ても明らかのように当時の日本ではよく利用されて、明治初期の字典や翻訳書に影響を与えている。中村正直『西国立志編』(明治4年)、『自由之理』(明治5年)、西周『利学』(明治10年)にその痕跡を残しているという。柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』(明治6年)の「偶然、内閣、領事、園芸、反射、同情、黙示」など、この辞書から訳語を取り入れたことがつとに指摘されている。その他に、近代日本語としてよく使われる下記の語もこの辞書に捜し求めることができる。「protein 蛋白質、positive pole 陽極、adjutant 副官、bank 銀行、beer 麦酒、imagination 幻想、想像、carbonic 炭酸、negative pole 陰極、insurance 保険、flag of truce 白旗、literature 文学、marshal 元帥、original sin 原本之罪、passion 受難、

principia 原理、privilege 特権、propaganda 宣伝、right wing 右翼、rule 法則、frigid zone 寒帯、torrid zone 熱帯、writer 作者、love 恋愛、reader 読者」など。

その豊富な訳語でたちまち注目され、二度にわたる翻刻も行われた。一回目は明治十二年二月刊行の中村正直校正、津田仙、柳沢信大、大井鎌吉訳の『英華和訳字典』乾坤二冊である。校正者の跋文に「余此書ヲ校ス、明治五年十二月ニ始マリ、同十二年二月ニ畢リ、蓋シ六タビ裘褐ヲ易ヘテ、終ニ能ク完功ス」とあり、また川田剛による明治九年の序文がある。タイトルのように最初から和訳を試みたため、日本語独自の訳語をその中から拾うことができる。二回目は明治十六年(1883)に井上哲次郎が編纂した『訂増英華字典』である。原文の中国語読みや方言漢字を取り除き、漢字訳語の取捨選択を行った。その後、20世紀の初頭までにこの井上『訂増英華字典』は何度も版を重ねた。しかも、1903年の再版本奥付には中国の年号で光緒29年、上海作新社発行とあり、また、明治三十九年(1906)の第三版にも同じく中国の年号がついているところから、この辞書は中国人をも想定して販路を拡げていったことが分かる。つまり19世紀の末から20世紀にかけて来日した多くの中国留学生がこの辞書を井上哲次郎のものとして認識した結果、そこに使われる訳語を日本で成立したものと見なしていた可能性もある。また、尺振八の『英和字典』にもなんらかの影響を与えているようである。しかも『哲学字彙』にある「presentation 表現」も編者である井上哲次郎がロブシャイトの訳語「display 表現」から借用した可能性がある。その意味で日本においてこの二種類和刻を行う際に日本語に馴染むため、どういう態度で、どれくらいの改正を行ったかが知りたいし、前者『英華和訳字典』の和訳の範囲と具体的な語の性格が分かれば、当時における日中両国語の訳語の相違もある程度分かるだろう。

## 5.

【書名】A Vocabulary and Hand-book of the Chinese Language, Romanized in the Mandarin Dialect, in Two Volumes Comprised in Three Parts

【著者】ドーリットル (Justus Doolittle 1824-1880, 漢字名: 盧公明)。宣教師として1850年中国福州へ派遣され、1864年一時帰国し、再び福州に戻り、1873年にアメリカに帰国した。

【成立】1872年 Foochow(福州)で出版、中国語名『英華萃林韻府』。

【解説】二冊三部からなる本書は一冊目が第一部 (PART FIRST, ENGLISH AND CHINESE WITH THE LATTER ROMANISED) で、6万6000種類の英語表現を収録した語彙集である。中国に滞在する外国人、または英語を学習する中国人に役立つために編集したと、著者の前書に書かれている。二冊目の前半は第二部で、一冊目から英華対訳の決まり文句(諺)や短句を抜粋しアルファベット順に配列している。二冊目の後半は第三部で、各国の宣教師や領事館の職員、税関職員その他中国在住の人々の協力を得て編集された分類語彙集である。全部で八十

五部門にわたっていて、機械、化学、物理、地理、天文暦算から仏教、道教、キリスト教の結婚式の手順、さらに中国各省の人口・面積、地方の諺や日常用語、一般知識まで広く集めている。なかでも、学術用語の執筆者に当時中国で活躍していた宣教師が多いことから、本辞書の編纂がその流布と定着に貢献したものと推定できる。

日本での矢田堀鴻による翻刻も主にこの第三部の分類語彙集に絞られていて「地理学之語、数学及星学之語、機関学之語、金石学及地質学之語、船舶及船具運用之語、理学之語、商法之語、人倫之語」と、明治初期の日本人にとって必要とされる8部門を抽出し、3200語に編集しなおした。原文では部門内の下位分類による小項目の並べ方だったのに対して、矢田堀は同じ部門にある語をすべてアルファベット順に並べ替えた。そして訳語にルビをつけたり、訳語の後に括弧入りの独自の解釈や挿訳をしたりすることで日本語の中に取り入れようとした。明治13年の『英華学芸詞林』(山田保蔵版)、14年の『英華学芸辞書』に続き、17年の『英華学術辞書』(東京 早川新三郎)へと、書名だけを少し変えつつ版を重ねてきたが、内容的な改変は少ない。和刻版のこの辞書の訳語は『英和字彙』(第二版、1882)に影響を与えたことが知られているし、「Telegraph 電報、Galvanic battery 電池、Light 光線、Numerator 分子、Geology 地質論、Properties of Matter 物理、Momentum 動力、Optics 光学、Area 面積、Constant 常数、Differential calculus 微分学、Logarithm 代数、Custom house 税関、Parliament Congress 国会、United States 美国、合衆国、聯合之邦、National University 国学、大学」などのように、数学・物理・政治関係でなお使用されているものは多いが、他の分野では用語の廃れが激しい。

また、Republic を「民主之国」、Reigning Family を「国家、国朝」、privilege を「権利、利益之處」と訳していたように概念の対訳が今日と異なるものもある。いわゆる概念の細分化(たとえば「連邦、共和、民主」)によって漢語類義語が絡んで定着していく過程を反映する資料としても利用でき、全体としては後期の漢訳洋学の語彙を反映するものと言えよう。和刻版について杉本つとむ・呉美慧編著の『英華学芸詞林の研究』(1989)があり、影印、索引、研究が付してあり使用に便利である。

#### 【参考文献】

- 岩崎克己『柴田昌吉傳』1935年、私家版  
 豊田実『日本英学史の研究』1939年、岩波書店  
 永嶋大典『蘭和・英和辞書発達史』1996年、ゆまに書房  
 町田俊昭『三代の辞書：英和・和英辞書百年小史』1981年、三省堂  
 森岡健二『改訂近代語の成立・語彙編』1991年、明治書院  
 飛田良文・宮田和子の『十九世紀の英華・華英辞典目録』『国語論究 6 近代語の研究』1997年7月、明治書院

- 飛田良文・宮田和子「ロバート・モリソンの華英・英華字典 *A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE* について」『日本近代語研究1』1991年、ひつじ書房
- 茂住實男「中国語を媒介にした英学研究」『大倉山論集』第二十七輯、大倉精神文化研究所、平成2年3月
- 沈国威『近代日中語彙交渉史』笠間書院、1994年
- 沈国威「大阪外大図書館蔵『英華字典』」『国語学』170号、1993年3月
- 遠藤智夫『『英和対訳袖珍辞書』とメドハースト『英漢字典』—抽象語の訳語比較—A~H』『英学史研究』第29号、1996年
- 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』八坂書房、1985年
- 杉本つとむ・呉美慧編著『英華学芸詞林の研究』早稲田大学出版部、1989年10月
- 吉田寅「プロテスタント宣教師メドハーストとギュツラフの中国文著作について」『歴史人類』13、昭60年3月
- 荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播』白帝社、1997年
- 荒川清秀「ロプシャイト英華字典の訳語の来源をめぐって—地理学用語を中心に—」『文明21』愛知大学国際コミュニケーション学会、1998年11月
- 那須雅之「W. Lobscheid 小伝—《英華字典》無序本とは何か—」『文学論叢』109、愛知大学、1995年
- 那須雅之「W. Lobscheid の《英華字典》について (1)」『文学論叢』114、愛知大学、1997年
- 木村秀次「『西国立志編』の漢語—「英華字典」とのかかわり—」『新しい漢字漢文教育』第36号、2003年
- 金敬雄「井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の修整についての考察」『或問』第3号 近代東西言語文化接触研究会、2001年11月
- 陳力衛「早期的英華字典與日本的洋学」『原学』第一輯、中国広播電視出版社、1994年2月
- 陳力衛「從英華辞典看漢語中的日語借詞」『原学』第三輯、中国広播電視出版社、1995年8月
- 陳力衛「日本近代語と漢訳洋書と英華字典」『女子教育』18、1995年3月